は道真自身の姿が重ねられているのは自明である。「495梅花」では転句で「人是同人梅異樹（その梅の花を見る者は同じなのに、この太宰府で見る梅の花と以前見てきた梅の花とは同一でない）」と謫居で見る梅花と京で見てきた梅花を想起し、結句で「知花獨笑我多悲（梅の花だけは昔にかわらず一人咲き新春を満喫しているが、私にとってはこの期を迎えるのは一層悲しみを増長させるだけの事である）」と梅花に感情移入をはかっている。そうしてこうした作品は死期の迫った延喜二年（九〇二）の秋に詠まれたと思われる「510問秋月」「511代月答」にも指摘することが出来る。この詩の場合、諦念から来る心情の安定が根底にあるところから生まれた作品だと考えられる。

一方、後者の「見立て」の技法については藤原克己氏による言及がある。[9] 藤原氏はこれを道真の特質の一つとして「見立ての表現にあくまでも執することによって独自の比興的比喩表現を切り開いてきた」[10]ことを挙げておられる。そうした傾向を持つ作品群がこの期に目立つ。「487東山小雪」では三・四句で「誤雲獨宿磵／疑鶴未歸田（谷間に白い雲がたちこめているのかと思うと、それは白雪が降ったのを見誤ったのだった。／白鶴が田に帰らないで山にいるのかと思うと、それは山に降った白雪だったのである）」と、「雪」を「磵に宿る雲」に「田に帰らざる鶴」に見立てた表現をしているし。「489白微霰」では三・四句で「麞牙米簸聲声々脆／龍頷珠投顆々寒（くじかの牙のような霰は、精米した米粒を箕であおるような、ぱらぱらという軽やかな音をさせて降ってくる／また竜のあごの下にある千金の珠を危険を冒して取ってきて投げつけた時のような、ぞっとする響きだ）」[11]と霰の降る音を「精米した米粒を箕であおるような」とか「龍頷の千金の珠を投げつけるような」音と見立てる表現をしている。同詩五・六句で「念佛山僧驚舍利／名醫道士怪鉛丸（一向専念に念仏している山寺の僧は、仏舎利がころげてきたかと驚く。／神仙の術を心得た名医の誉れ高い道士仙人は、霰が転がってくるのをみて、煉って丹に作るための鉛丸かとあやしむ。）」[12]と「霰」が「山僧」には「仏舎利」に、又「道士」には仙薬を作る材